Ⅰペテロ１章
「金よりも高価な信仰」

公文光

本日はペテロへの手紙第一から共に学んで参ります。

本日の箇所は「人類の救いの計画」という壮大なテーマを扱っています。もう少し細かくその内容を分けてみますと、「神が人類の救いを達成する経緯」と「それがどのようにキリスト者、一人ひとりの私生活と関わるのか」の二つ分けることができます。後ほどこのことを確認しつつ参りますが、「神が人類の救いを達成する経緯」と「それがどのようにキリスト者、一人ひとりの私生活と関わるのか」の二つのことが交互に述べられていることが見えてきます。

考えてみれば、私たちは神が人類の救いとその経緯を考えることはなかなかないのではないかと思います。しかし、その視点は非常に大切なのではないかと思います。

根拠はいくつかありますが、まず、ペテロはそういう視点で救いを考え、その延長線上で私生活を考えていたという点があります。聖書を書いたペテロの視点は当然、大切にするべきです。

同時に、それが救いというテーマに馴染むという点があります。そもそも、キリスト者がキリストを信じたいと願うようになったのは、狭い自分の生活のことに熱中していたからではないのではないかと思います。多くの場合、そこに意味を見出すことができなくなり、より広く、世界のこと、神のことを考えるようになった場合がほとんどではないでしょうか。

したがって、キリスト者が生活する時に、また、その狭い自分の生活についてだけ考えるべきではないと言えるのではないでしょうか。そうではなく、より広い「神が人類を救う経緯」を考えることからはじめ、その文脈のなかで自分の生活とはいったい何か、どう生きれば良いのかと考えるべきだと言えます。

しかし、罪人の修正として、一旦神を知っても、すぐにもとの生活に戻っていってしまいます。神を忘れ、自分の生活とこの世的な楽しみがいつの間にか中心となってしまい、神は自分の生活を守る「守り神」かのように考え出すのが罪人だと言えます。

そういった罪人の修正はペテロの時代から今に至るまで変わっていないのではないかと思います。そういった罪的な修正を持つ人々に対し、ペテロは人類の救いという大きなテーマをもう一度思い出させます。神の壮大な救いの計画の中で、私たちの日々の生活は何なのか。この世で価値があるものは何か。何に注意して生きていけばよいのか。

このような広い視野を持つのは不自然だと思う人もいるのではないかと思います。しかし、むしろ自分の生活やこの世の小さなことに固執する生き方のほうがよっぽど不自然であると考えられるのではないでしょうか。

この世の忙しさや人間関係や、誘惑などに目を奪われずに、目を覚ましていきていかなければなりません。そのことを念頭におきながら、さっそく読んで参りましょう。

1-2 節
1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち、すなわち、 2 父なる神の予知のままに、御霊による聖別によって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人たちへ。恵みと平安が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。

ペテロが手紙を送った先の地域は、現代のトルコのですが、地中海に面する南の沿岸部を除いた、トルコ中心部と北西部です。この手紙はその地域にある教会すべてを巡回して読まれるように送られたと言われています。その教会は異邦人たちがメンバーのほとんどを構成する教会だったのではないかと思われます。

ここで、この 2 節冒頭にある「父なる神の予知のままに、御霊による聖別によって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人たちへ」という部分に注目していただきたいと思います。この部分ではこの手紙の主要なテーマすべてに触れています。その言い回しに注目していただきますと、神の働きばかりについて語られていて、人間側は受動的であるということが分かります。神の計画に組み込まれた人として、教会は紹介されています。「自ら神を信じた者」という狭い視点ではなく、「神の計画に組み込まれる恵みに預かった者」という広い視野のアイデンティティを持って、手紙の内容を聞くことが期待されます。

3-5
3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。 4 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。 5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。

ペテロは神をほめたたえるところで手紙をはじめます。キリスト者たちの救いはまだ完成していませんでしたが、神の救いのわざ自体にはほめたえられるべき根拠がすでに、十分ありました。

3 節をご覧になってください。神をほめたたえる内容はイエス・キリストの復活からはじまります。次に 5 節の後半をご覧になってください。ほめたたえる内容は終わりの時に人々の信仰が現される、未来のことまで至っています。すでに未来は確定事項かのように、神をほめたたえています。私たちにも、キリストの再臨に対する信仰があることが期待されます。

キリスト者はキリストの復活と、再臨の間の時代に置かれています。キリストの復活は、この世の空しい現実、そしてこの世の罪的な現実に対して、神が勝利したということを現しています。こ

の世の先の世界を神は与えてくださるという神の意志がそこには現れています。したがって、私たちは希望を持つことができます。3 節後半の「私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました」はこのことを言っていると思われます。

その希望の内容は、この世のものとは違い、朽ちることのない資産に対する希望であるということが続く 4 節において語られています。しかもその資産は今、すでに天において蓄えられていると言うのです。すでに蓄えられているということの背景には神が持つ人間に対する希望と愛が現れていると言ってもよいでしょう。

5 節には、終わりの時までの生活についても、神が守ってくださっていると言われています。ただし、これはキリスト者が脱落し得ないということとまでは言えません。条件として、人が神に信仰を持ち続けるということがあります。このことについてはまた後ほど考えることにしたいと思いますが、いかがでしょうか。この箇所を読みますと、救いのすべてが神の働きであるということがよく分かるのではないでしょうか。しかし、人は神をほめたたえることを忘れ、すぐに救いの事実を忘れ、自分の人生に没頭し、救いから脱落していってしまうという面があります。

しかし、ペテロが手紙を充てたキリスト者たちは、忘れていなかったようです。

6-7

6　そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならないのですが、　7　試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。

この地方の教会の信徒は、神の救いのわざを文字通り喜んでいたようでした。口先だけの喜びではなく、本当の喜びがあったのでしょう。

振り返ってみますと、ペテロが手紙を充てた教会とパウロが手紙を充てた教会はまったく質が違ったようにみえます。パウロは教会の問題を次から次へと指摘しなければならず、教会が混乱していた様子がそこから読み取れます。別の言い方で申し上げますと、パウロは優しく、どうしようもない人たちに粘り強く接するタイプの人であったようです。他方、ペテロの二通の手紙を見ますと、教会内部の問題はほとんど言及されていません。それどころか、信仰が熱い信仰者の姿が浮かんできます。

ただ、すべて楽観視できる状態ではありませんでした。まだその信仰は試練を通して試されないといけませんでした。「試される」のですから、当然脱落者も出てきます。

さて、ここでは「試練」ということばが登場しますが、具体的にどのような試練が教会にあったのでしょうか。解釈者の中には、大きな迫害が起きていて、それが試練だったと言う者がいます。「火で精錬される」といった強烈なことばが使われていますので、強烈な迫害を想像したのだと思われます。しかし、迫害についての言及はこの手紙にはほとんどありませんし、この時代に迫害があっ

たという歴史もありません。

この手紙に記されている試練はそういったドラマティックな試練ではなく、「普通の生活」における試練だったのではないかと私は思います。ペテロの手紙では「アナストロフェース」というギリシャ語が高頻度で登場していますが、これは「生活」「生き方」「ふるまい」と訳せます。普段の生活の中でどのような「生き方」「ふるまい」をする者になるのかが試されていると言えます。

より具体的に異邦人との関係、親との関係、夫婦関係、自分の過去との関係についていろいろと教えられています。そのような人間関係が試練だというのはよく分かるのではないかと思います。人間関係の中で、激しい感情がぶつかるものです。時には憎しみ、時には癒着、時には悔しさ。制御不能な激しい感情が人を支配します。そういった普段の生活の感情が火の精錬と表現されているようです。

すると、そういった日々の人間関係の摩擦は、意図的に神から与えられていると言えるのではないかと思います。火で金を精錬するように、たましいが精錬されていくということでしょう。日々の鍛錬の中で純粋な信仰が生まれてくるか、この世的な心が生まれるのか、試されていると言えます。もし、その鍛錬の中で純粋な信仰が生まれてきたのであれば、それは金よりも高価であるというのは注目に値します。すくなくとも、神にはそう見えるようです。いずれにしても、私たちはその日々の人間関係の摩擦を、単なるストレスの原因と捉えるのではなく、神の前で正しくなっていくため、自分を見直す機会と捉えるべきでしょう。

では、その純粋な信仰とはどのようなイメージのものでしょうか。

8-9

8　あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。　9　あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。

手紙を充てた教会には、神を見ないでも信じる信仰があり、その結果ことばに尽くせない喜びに満ちていました。ことばに尽くせないと書いてありますので、今までに体験したことのない本物の喜びがそこにあったのではないかと思います。神を純粋に信じて愛する者にはそういった体験があるようです。それが金よりも高価な信仰を持っている証であります。

繰り返しとなりますが、ペテロが手紙を充てたキリスト者たちは、本物の信仰があり、非常にレベルが高かったようであります。

信者たちに神の計画がどのような影響を及ぼしたかがここで語られていますが、今度はまた神の救いの計画というテーマに戻ります。

10-12

10　この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。 11　彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証ししたときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。 12　彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。

人間のことばは虚偽に満ち、ことばと現実は伴いません。言行一致していないと申し上げたらよいでしょうか。しかし、神のことばは必ず行われ、現実そのものを現します。「光あれ」といえば光があるのです。

預言者たちはその神が人類の救いについて何を言うか、非常に関心があったようです。人を滅ぼすと言えば必ず滅びますし、そのたましいを救うと言えば必ず救うからです。その神が預言者を通して、キリストを送るとお語りになりましたが、非常に曖昧な表現でありました。ここで言われているのは、預言者たちはキリストについてもっとはっきりしたことを知りたかったにも関わらず、それを知ることができなかった、それは未来の世代のためにとってある知識であったということであります。

12 節には「御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています」。御使いについて知られていることは限られていますが、たとえば、人が救われるのを大いに喜ぶということがルカの福音書には書いてあります。人間の置かれた絶望的な状態を知っているからこそ、その救いは奇跡的で、それは神の栄光を現すと御使いは分かっているのかもしれません。しかし、御使いには未来が見えているわけではないようです。彼らも預言者と同様で神の救いがどのように展開するのかを知ることを求めているようです。

すると、御使いも預言者もキリストにある人類の救いの計画に大きな関心を寄せていますが、罪人だけが無関心であると言えます。至って狭い視野で、私生活の取るに足らないことにいつまでも固執しているのが罪人であります。

続く 13 節は「ですから」ではじまります。人間の私生活を中心に神が計画するのではなく、人間が神の計画を中心にし、それを根拠にして生き方を変革していくことが期待されます。

13（私訳）
13　ですから、あなたがたは心を引き締め、目を覚ましていて、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みのみを待ち望みなさい。（私訳）

福音は曖昧であってはなりません。ここで「目を覚ましている」と訳されている原語は「しらふである」という意味です。つまり、福音を酔っ払っている感じでぼやけた理解をすることが懸念されています。

それは、より具体的にはどのような状態でしょうか。節後半をご覧になっていただけますと、「イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みのみを待ち望みなさい」と書いてあります。これが純粋な信仰であるとすれば、曖昧な信仰というのは、複数のものに希望を置く信仰だと言えます。自分の家族や子供、この世の政治、人間、こういったものと同時にキリストにも希望を置く二心の信仰が悪しきものであると言えます。しかし、それがほとんどの人の信仰の実態であります。

たとえば、神に希望を持ちながらも人間にも希望を置く人に、時には嫌な人間関係が与えられ、自分が人に希望を持って如何に愚かであったのかを悟ることができるか試される場合などがあると言えます。そういったプロセスを通して、人は目を覚ますことを覚え、金よりも高価な信仰を得られると言えます。

そのプロセスに必要なのは、人間的なテクニックではなく、子供のような親への信頼です。

14

14　従順な子どもとなり、以前、無知であったときの欲望に従わず、

たとえ過去の欲望に惹かれる自分を自覚するに至った時に、神に信頼して、たとえばどうすれば良いかの知恵を祈って求めればよいということではないでしょうか。

そして、最終的には自分の過去のこの世への癒着がなくなり、完全に神のみを信じる状態であります。それが「聖なる」状態であります。

15-17

15　むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。 16　「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。17　また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごしなさい。

イエスは「主よ、主よ」と言う人がすべて御国に入るわけではないと言いました。17 節でも同じようなことが言われているようです。神はひいきすることがありません。実際にその人の生活の中で聖なる生き方があったのか、試されます。神はひいきしないということを心に刻み、その結果出てくる恐れを心に抱きながら生きることが良いことであると言われています。

ここでもう一度ペテロは、神の救いの計画という広い視点で話します。

18-21

18　ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、 19　傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。 20　キリストは、世界の基が据えられる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために現れてくださいました。 21　あなたがたは、キリストを死者の中からよみがえらせ

て栄光を与えられた神を、キリストによって信じる者です。ですから、あなたがたの信仰と希望は神にかかっています。

人間が贖われることは当たり前なことではありませんでした。そこにはキリストの犠牲があり、それはすべてめぐみにより神が与えた最善のものでした。そのことを忘れ、この世の生き方に戻っていくことは、金よりも価値があるキリストを捨てて、何の意味のない生活を選ぶかのような行為で、神に対して侮辱的であると言えます。価値をまったく見定められていなかったということに他なりません。

ペテロがこのように語るのは、手紙を受け取った教会も優れてはいたものの、やはり罪人であったからでしょう。罪人はすぐにめぐみを忘れ、この世的な生活も愛して、二心の者となっていきます。そのような人の特徴は、すべて中途半端で、曖昧であるというところであります。その愛も中途半端だと言えるでしょう。

22（私訳）
あなたがたは真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになり、きよい心で互いに真っ直ぐに愛し合いなさい。（私訳）

この世を愛する限り、偽りのない兄弟愛は不可能であります。したがって、人はそのたましいをまず清めてから、はじめて愛することが可能だと言えます。

少し補足いたしますが、愛自体は誰にだってあります。しかし、その愛はほとんどの場合、限定的な愛であると言えます。自分の気分による、相手の態度による、相手が悪いことをするとすぐに嫌う、などあります。それはきよい心の愛とは言えません。そのような人の不順な愛は長続きしません。どこか違和感があり、偽善的に見えます。しかし、本人は、自分には愛があると思っている場合が多いのではないかと思います。

まっすぐで純粋な愛はいつも変わらず、偽善的なところはありません。そのような愛で兄弟に接しなさいとペテロは語っています。これは非常にレベルが高いものが求められていると言えます。小手先のテクニックでどうにかなるものではありません。ここに書いてある通り、たましいのレベルで清められなければ不可能だと言えます。しかし、純粋に人を愛することができるようになった時、その人の状態は「聖なる」状態そのものであり、その人はたましいの救いを得たと言えるのではないでしょうか。

1 章の最後に、ペテロは神のことばの力強さを知るようにと勧めます。

23-25
23　あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。 24 「人はみな草のよう。 その栄えはみな草の花のようだ。 草はしおれ、 花は散る。 25　　しかし、主のことばは永遠に立つ」

とあるからです。
これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。

この、24 節から 25 節の前半までででカッコに括られている部分はイザヤ書からとった引用した部分です。このことばは人間の栄えとかみのみことばを比較しています。人間の栄えに対しては完全に否定的ではありません。それは花に喩えられていますが、花は美しいものです。だからこそ、人間の栄えは誘惑になり得るのです。ただ、その栄えは瞬間的なもので、いつかは消えてなくなってしまうという弱点がいつもあります。

他方、神のことばは花のように目に見えるものではありませんが、それは永遠に立ちます。

ここでペテロが言っていることは、私たちは永遠にたつ神のことば、福音を与えられたということであります。その福音は預言書において預言され、それがついに与えられました。神は有言実行の神であります。そのみことばの効力は人間に阻止することはできません。それを個人として拒否することができても、福音は他の多くの人々に依然として救いを与え続け、いつまでもその真実は変わりません。

その真実でいつまでも残るみことばが福音で、それにより人々は新しく生まれる機会が与えられます。神の生きたことばを大切にし、それを糧とすれば、人はいのちを得て新しく生まれることができます。人がそれを受け入れるかどうかという点よりも、すでにみことばが語られ、与えられているという点がまず大切であるというのが、ペテロの主張のようです。それを真実と思い、糧とするかどうかは、それぞれに委ねられています。

さて、本日はペテロの手紙第一から学んで参りましたが、冒頭で申し上げました通り、まず広いところに視点を置くことが大切だと言えます。神の救いには長い経緯があり、何千年前からの歴史、もっと言えば天地創造の前からも神の救いの計画はありました。そして、その計画はいつか、キリストの再臨により、終わりを迎えます。

キリストの時代に生きる私たちは、まず、神がキリストを送り、キリストは死者の中から復活し、それを通して希望を与えてくださっていることを覚えなければなりません。そのような歴史的な経緯の中で生きる私たちがするべきことは明らかです。キリストに倣い、生活のすべてにおいて聖なる者となることです。仕事、家族、結婚などは二次的、三次的なことに過ぎません。私たちは普段の生活におけるいろいろな試練を通して磨かれていき、神の公平なさばきに備えなければなりません。しかし、その営みにおいても、それを求めれば、御霊の守りがあります。

この適用として、まず、私たちは普段の生活についての考え方を変えなければなりません。人は生きていれば、必ず人間関係で多くの苦痛があります。人間はバイソンのような巨体を持った猛獣のようなもので、非常に頑固で、動きません。人はそのような猛獣的な人々とどこかで必ずぶつかり、嫌がって避けようとしても避けられず痛い思いをし、激しい苦痛を覚えるものです。

しかし、それは良いことで、負けて頭を下げるようになると謙遜になり、たましいの救いにつながる面があります。劇的なことで人は救いを得るのではなく、そういった日常において人は救いを得ていくのであります。

しかし、ここでクリスチャンが陥りがちな二つの落とし穴があります。一つは、その日常を試練とは捉えず、代わりにそこに意味を見出そうとし、挙げ句の果てに、生活を喜ぶことを中心とした思想体系まで教会で形成してしまう危険性です。そのような教会は、救いを忘れ、この世を愛した教会です。そのようになった教会の特徴として、福音に希望を本質的に持っていない、偽りの喜びしかない、キリストを愛している感じがしない、希望にみなぎっていないなどがあります。

二つ目の落とし穴は、試練に対する無関心であります。人間関係の中でいろいろな感情が出てきても、それを、自分の在り方を振り返る時とは捉えず、ボンヤリと生きていく道であります。そのようなクリスチャンは至って無責任であるとしか言いようがありません。自分には愛がないにも関わらずそれを問題とせず、それでも自分の救いを当然のこととし、キリストが都合の良い神だと考え、「ありがたや」としか思っていないのであります。

私たちはこの二つの落とし穴を避け、日々の試練に向き合っていくものでありたいと思います。そのような試練を通して、この世の空しさを覚え、神に希望を置いて生きるとはどのようなことなのかを学ぶことができます。そして、私たちはその試練の果てにたましいの救いにつながる信仰を得る者でありたいと思います。精錬された、救いに至る信仰は金よりも高価であり、ことばには尽くせない喜びがその信仰者に宿るからであります。

祈り：父なる神様
本日はあなたの救いのわざを振り返り、あなたの力強い救いのわざについて知りました。

どうぞ、御国に到達できますように、日々の試練に向き合うことができますよう、お助けください。また、あなたの救いのわざに応答し、私たちも幼子のようにあなたに従順になれますよう、導いてください。
イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。